

文化

米大使の「広島参列」に思う

ジョン・ルー大駐日米大使が広島平和記念式典に初めて参列し、65年たつてようやく訪れた日米関係の新しい一ページをテレビ中継で見ながら、私はなぜか暗い気持ちになった。6月に38年ぶりに取材した沖縄各地で、鳩山由紀夫前首相の「少なくとも県外移転」との発言に対する静かな怒りが、普天間飛行場移設問題解決の道を閉ざし、日米同盟そのものの脆さまで露出させている現実が接してきていたからである。原爆投下と同じ65年前の悲惨な地上戦で、民間人だけでも十数万人の犠牲者を出した傷跡が、沖縄にはいまも残る。

私には、身じろぎもせず炎天下に立ちながら、広島では終始沈黙を守り、帰京後も「未来の世代のため核兵器のない世界を実現するために協力する」との声明を発表しただけのルー大の姿に、この沖縄と同根の日米同盟の試練が凝縮されているように思えた。

米務省スポークスマンは大使参列の理由について、「第二次世界大戦のすべての犠牲者に敬意を表するため」とだけ語った。国防総省スポークスマンに至っては、大使初参加の事実を知らなかったふりをした。

この背後には依然、原爆投下容認論が多数を占める米世論に



松尾 文夫

気を使わねばならないオバマ政権の国内政治上の守勢がある。一向に失業率が下がらず、オバマ大統領がノーベル平和賞授賞式の演説で「正義の戦争」と位置付けたアフガニスタン戦争も泥沼化し、11月の中間選挙で大敗の予想も出始めた。

それだけではない。オバマ政権支持のアジア系市民の間には、オバマ大統領の広島訪問に「アジア各国に対するあの戦争での日本の加害者としての立場を被害者のそれに変えてしま

湾のアリゾナ記念館を日本の首相が誰一人訪れていない事実を思い起こす人物は、政権内にはいないのだろうか。忘れてはならない。菅首相にとっても必要なのは、ルー大大使参列を受けて、速やかに真珠湾弔問の意思を明らかにすることだと思われる。

そして、韓国の李明博大統領の評価を得た菅首相の韓国併合100周年記念談話を、中国、さらには北朝鮮まで含めた東アジア諸国全体との「歴史和解」の達成と、そのケジメの証としての南京、ピョンヤンを含めた献花外交展開の起点としなければならぬ。

北朝鮮に対しても、拉致問題解決のためにも避けて通れない国交正常化交渉スタートのため日本オリジナルの「直接接触」が求められていると思う。米朝関係は、表面の緊張とは裏腹に虚々実々の「外交ゲーム」段階

菅首相は真珠湾弔問を

普天間問題の試練に向き合おう

う」との反対の声が上がっている。もちろん中国、韓国などの国内世論と連動している。6日のウォール・ストリート・ジャーナル紙に寄稿した保守派論客は、日本は戦争を始め、アジア全体で1700万人も殺戮した「都合な真実」に口をつぐんでいる、とこれに同調した。「ブラクマチスト」オバマ大統領が無視できない現実である。

片や、菅直人政権では9月の代表選挙を前に、普天間問題のみならず、対米政策全体での空白が際立つ。65年間、あの真珠

その出口を見つづけることは容易ではない。しかし、沖縄の人々が怒りの中で口にする琉球王国時代の「緩衝国」としての過去の中に突破口は探れないだろうか。韓国との過去に対するのと同じように、本土からの「痛切な反省」の上に立ってである。

日本、中国、朝鮮半島、そして米国とも共生(那覇には1854年、琉球王国と和親条約を締結したペリー提督の「米国人は琉球人の永遠の友人である」との言葉が彫られた上陸記念碑がある)してきた時代に「先祖

返りする発想の中で、最大限の負担軽減と地域情勢の変化による縮小、再編を条件に米軍基地を「必要悪」として認めるオプシヨンをあえて提案してみたい。

1972年のニクソン-毛沢東の握手以来の米中和解が「日米安保条約による米国の軍事力の傘が日本の再軍事大国化を防いでいる」、つまり沖縄米軍基地は東アジア全体にとっての安定剤であるとの論理を双方とも受け入れて、今日にいたっている事実を忘れてはいけない。皮肉なことに、その中国がいま自らの軍事力の傘を東アジア、南シナ海に広げつつある。沖縄米軍基地は二重の意味で「必要悪」としての役割を果たしつつあるわけだ。

2008年の広島記念式典に大使館員を参列させた中国は、昨年に続き今年もなぜか欠席だった。その中国の総領事館を那覇に開設する交渉が自由に浮いているという。この中国を取り込んだ沖縄の「和解の島」構想はなりたないのだろうか。

ルー大大使参列は、広島、長崎がこれまでも増して明確に発信した「核兵器なき世界」実現の先頭に立つとのメッセージを結果させるためにも、普天間問題が代表する日米同盟の試練と正面から向き合う作業を日本に突きつけたと思う。

(まつお・ふみおジャーナリスト)